
僕たちが羊を数えることはもうないかもしれない

ケセランパセラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちが羊を数えることはもうないかもしれない

【Nコード】

N3232BA

【作者名】

ケセラランパセラ

【あらすじ】

主人公 飯島健吾 “いいじま けんご”は今年から高校生になる。新しい出会い新しい環境に期待を膨らませる健吾。ただ彼はこのときまだ知らなかった。これから世界中があるウィルスによって崩壊していくということを…

始まり・i（前書き）

ひらめいたので書いてみました。

駄文・グダグダなどところがあると思いますが暖かい目で見てください。

始まり・1

人間が生きていくうえで必要である行動

“睡眠”

僕こと 飯島健吾 ” いいじま・けんご “はこの行動をしているときが一番幸せだ。

今もベッドの上で暖かい毛布に包まれながら爆睡中であつた。

だらしなく足を投げ出し口の端からうつすらとヨダレが垂れいい夢でも見ているのかなぜか表情は幸せそうにほころんでいた。

しかし、そんな幸せもずっと続くわけではない。しばらくすると彼の部屋のドアが勢いよく開け放たれた。

「健吾ー！ あんたいつまで寝てんのー！！ 遅刻するわよ！」

とたんにけたたましい大声が部屋中に響く。

「うーん…あと5分…」

そう言つて毛布を深くかぶろうとする。

「なに言つてんの！ あんた今日入学式でしょうが！」

そして、勢いよく毛布を剥ぎ取られる。

「うわっ！」

あまりの勢いのよさにベッドから落ちそうになる。

「もう、何するんだよ母さん！」

そこにいたのは僕の母さん 飯島 美鶴 “いいじま みつる” だった。

「何するんだよじゃないわよ！ あんたがいつまでも起きてこないからわざわざ起こしにきてあげたんでしょが！」

片手に掴んだ目覚まし時計を顔の前に突きつけて指をさされる。

そこに表示されていた時刻は8時10分。遅刻寸前の時間だった。

「え！？俺目覚ましかけたのに何で？」

「んなことよりさっさと準備して行きなさいよ」僕は急いで着ていた寝間着を脱ぐと高校の制服に着替えた。机の上に置いておいた学

生鞭を乱暴に掴みそのまま部屋を出る。

「気おつけて行くのよー」

「わかつてるー！」

今日から僕は高校になった。そして今日は入学式である。初日から遅刻なんてしたらカッコ悪い。「何でこついうときに寝坊するかな僕はー！」

自分のことを腹立たしく思いながらとにかく学校に間に合うことを祈っていた。

けれど僕はこの時まで知らなかった。

寝坊できるということがどんなに幸せなことであるのかということ。

始まり・2

僕はなんとか入学式に間に合った。後少し遅れていたらおそらく間に合わなかっただろう。

急いで学校の中に入り昇降口に張り出されているクラス表を見る。

自分のクラスは3組だった。

教室の中に入るとまったく知らない顔ばかりでほとんどの生徒が緊張しているのかそわそわしていた。どうしよう…すぐく緊張するんですけど。

とりあえず自分の席を探すため教室の中をキョロキョロする。

そのとき、僕はたまたま一人見たことのある顔を見つけた。

「あれ？智美じゃないか」

「え？健吾？」

そこにいたのは幼なじみの 滝沢 智美 “たきざわ とみ” だった。

「お前もこのクラスだったのか」

「うん。っていうかやつぱりあんたと同じクラスなのねあたしは」

そう、僕と智美は幼稚園の頃からの仲なのだが今まで幼稚園はもちろん小学校、そして中学校とずっと同じクラスだったのだ。

「みたいだな。でも知ってる顔がいて安心したよ」

「まあね。あたしもなんだか安心したわ。しかも今回に限っては席も隣同士みたいよ」

「え！？本当に？」

そう言われてみると確かに教室の中で空いている席は智美の隣の席だけだった。

「ここまですると裏で何か仕組みれてるんじゃないかと思うわよね」「た、確かに…」

ここまでするとそう思いたくもなるかもしれない。

まあ、お互いの仲は悪いわけではないので問題はないわけだが。

そして、少ししてからチャイムが鳴り教室の中に教師が入ってきた。
「皆さんおはようございます。今日から皆さんの担任になります 柴田 孝二 “しばた こうじ” といいます。これから一年間よろしくお願いします」見た目はまだ若い感じのする男性教諭だった。
たぶん、教師になってからまだそんなにたってないのではないのだろうか。

「じゃあ、早速皆さん体育館に移動してください」
そう言われてみんな一斉に体育館へとむかう。
そして、入学式が始まった。

校長先生の長い話や在校生によるイベントなどがある普通の入学式だった。何度か寝ちやいそうになったけどなんとか耐えた。偉いぞ、俺。

そして入学式が終わり今日は後は帰るだけである。

「ねえ、健吾」

「ん？どうした智美？」 「帰りにちょっと買い物付き合ってくれない」

「ああ、別にいいよ」

というわけでデパートに買い物に来た。

「ところで何買うんだよ智美？」

「んゝ…ひ・み・つ」

なんだそりゃ。秘密にしなきゃいけないようなものを買っのか？

とりあえず智美について歩く。その途中、電気店の前に並ぶテレビのニュースでこんなことを言っていた。

“今、世界中でなぜか自殺する人間が増えてきている”

なんとも物騒なニュースであった。世界規模で自殺者が増えているなんてよくないなあゝ

このときの僕はそれくらいにしか考えていなかった…

始まり・3 (前書き)

ホラーって書くの難しい(・・・) ” (・・・) どうしてまじゅう…

始まり・3

「ただいま」

しばらく智美と一緒に買い物をした後、僕は家に帰ってきた。結局智美が何を買おうとしていたのかは最後まで教えてくれなかった。

「あれ？母さん？」

なんだか家の中が静かだった。母さんどこかに出掛けたのか？そう思ったが玄関には母さんの靴があった。

ということは…

「母さん寝てるな」

僕は確信していた。

なぜなら僕の家族は寝るのが好きだからである。暇さえあればすぐに寝る。どこでも寝れる。そんなグータラな家族なのである。

自分でいうとなんだか情けなくなってくるな…

居間に入ると案の定母さんはソファアの上で寝ていた。

「やっぱり。母さんこんなところで寝てると風邪ひくよ。ちゃんと布団で寝なっつて」

ゆさゆさと体を揺さぶる。しかしまったく起きる気配がない。

参ったな…どうしよう。………まあ、いいかこのままで。

そのうち起きてくるだろ。

とりあえず放っておくことにした。

自分の部屋に戻りすぐさま制服から私服に着替える。

「やっぱりこの格好が落ち着くよな」

そのままベッドにダイブする。母さんが日干してくれたのかベッドシートと毛布がポカポカしていた。

そのまま枕に顔を埋め目を閉じると僕の意識はほんの数10分で闇に落ちていった。

しばらくして僕はゆっくりと目を覚ました。

いつの間にか部屋の中は真っ暗になっていた。

「ふぁあゝ…気持ちよかった」

まだ頭がボーっとする。とりあえず部屋の電気をつけて時計を見ると時刻は19時だった。

「あゝ…お腹すいたなあゝ」

そう思っていたとき

「健吾ーご飯できたわよー」

ちょうどいいタイミングでご飯ができたようだった。

ボーっとする頭を起こし居間に行くとテーブルの上に美味しそうな和食料理が並んでいた。

「お、健吾起きたか」

そして、テーブルにはすでに一人座っていた。

「父さんおかえり」

そこにいたのは父 飯島 竹富 “いいじま たけと” だった。

仕事は一応サラリーマンで営業担当らしい。大変な仕事なのだろう髪は所々白髪が混ざり顔つきも少し疲れている感じがした

「さあ、じゃあ食べましょう」

母さんもテーブルにつき家族全員で夕食を食べる。

「ねえ、健吾。学校はどうだったの？」

「どうって…普通だよ。あ、そういやまた智美とクラス一緒だったよ」

「あらよかったじゃない！」

なぜか母さんは嬉しそうだった。

「本当にずっと一緒だな。健吾と智美ちゃんは」父さんもニヤニヤしながら肘でツンツンしてきた。

「まあ、知ってる顔がいるのはありがたいけどさ。っていうか何で二人とも嬉しそうなんだよ」

「嬉しそうになんかしてないわよー」

母さんはからかうような口調で言った。

今日の夕食はその話題で持ちつきりだった。

その後、今日は少し疲れたのでサッと風呂に入り少し早めに寝ることにした。

現在時刻22時30分。

風呂から上がり居間に行くときまだ父さんが起きていた。

いつもなら仕事で朝早くに家を出るのでもう寝ているはずなのだが。

「父さんまだ寝ないの？」

「ん？ああ、なんだか全然眠くなくてな。もう少し起きてるよ」

「そう。んじゃおやすみ」

「ああ、おやすみ」

まあそういうこともたまにはあるだろう。そう思い僕はあまり心配しなかった。

しかし、この時すでに異変は始まっていたのだ。僕が気がつかないうちにゆっくりとしかし着実に…

異変・i（前書き）

グダグダです。よろしくお願いします。

異変・1

次の日、昨日は少し早めに寝たので朝早くに起きられた。余裕があるので朝食もゆつくりと食べることができる。

ああ、余裕って大切。

「あんたが早起きとはね。今日は雨かしら」

僕と向かい合うように座り同じく朝食を食べていた母さんがそんなこと言っていた。

「あのね、僕だって早起きすることくらいあるっつーの」
少しムツとして言い返す。

「はいはい、偉い偉い。でも、できれば毎日こうだといいいんだけどな」
「うっ…それを言われちゃお終いなんですけど。」

「あつ、そういうや健吾。話し変わるけど今日お父さんちよつと様子がおかしくてねなんだか昨日全然眠れなくてずっと起きてたんだって」

「え！？父さんが！？」

父さんが眠れていない？そんなことあるのか？

父さんはどんなことがあっても毎日必ずきちんと最低5時間は睡眠をとる人なのに。

ましてや僕の家族は寝るの大好きなんだぞ。

「そ、それで？」

「大丈夫なの？って聞いたら大丈夫って言っただけのまま仕事行っちゃった」

「あ、仕事には行っただけ」

「うん…でも本当に大丈夫なのかしら」

父さん一体どうしたんだろう。何かあったのかな？

僕は学校につくまでの間ずっとそのことについて考えていた。

校門をくぐろうとしたときいきなり背中を誰かに叩かれた。

「おはよ健吾」

そこにいたのは智美だった。

「お、おはよう」

「どうしたの？そんな難しい顔して」

「ああ、いやちょとね」「ふーん。何か悩み事なら相談のるけど？」

「いや、大丈夫大丈夫。心配してくれてありがとう」

「べ、別に心配とかじゃないし」

あれ？そうなのか？心配してくれたわけじゃないのか。

まあ、別にいいけど。

教室に入りいつも通り自分の席について授業の準備をする。

しばらくしてチャイムが鳴り朝のホームルームが始まった。

これまたいつも通り先生が教室に入ってきて朝のホームルームが始まる。しかし、今日は少しいつもとは違うところがあった。

「皆さんおはようございま…ふあああ…」

やけに先生が眠そうにしていたのだ。

どうしたんだろう？いつもはもつとシャキッとしているのに。

「ああ、すいませんね皆さん。ちよつと昨日眠れなかったもんでえ？先生も眠れていないのか？

「そっぴやさ、家のお母さんも昨日眠れなかったんだって」

ふいに智美がこっそり話しかけてきた。

「え！？智美の家も？」

「も？ってことは健吾の家も？」

「うん。父さんが眠れなかったって…」

「そうなんだ…」

「智美は…」

「その二人、私語は控えてくださいね」

「「すいません…」」

一体どういふことなのだろう。ただの偶然なのだろうか。

僕はこのときなぜか軽い胸騒ぎがしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3232ba/>

僕たちが羊を数えることはもうないかもしれない

2012年1月13日19時47分発行